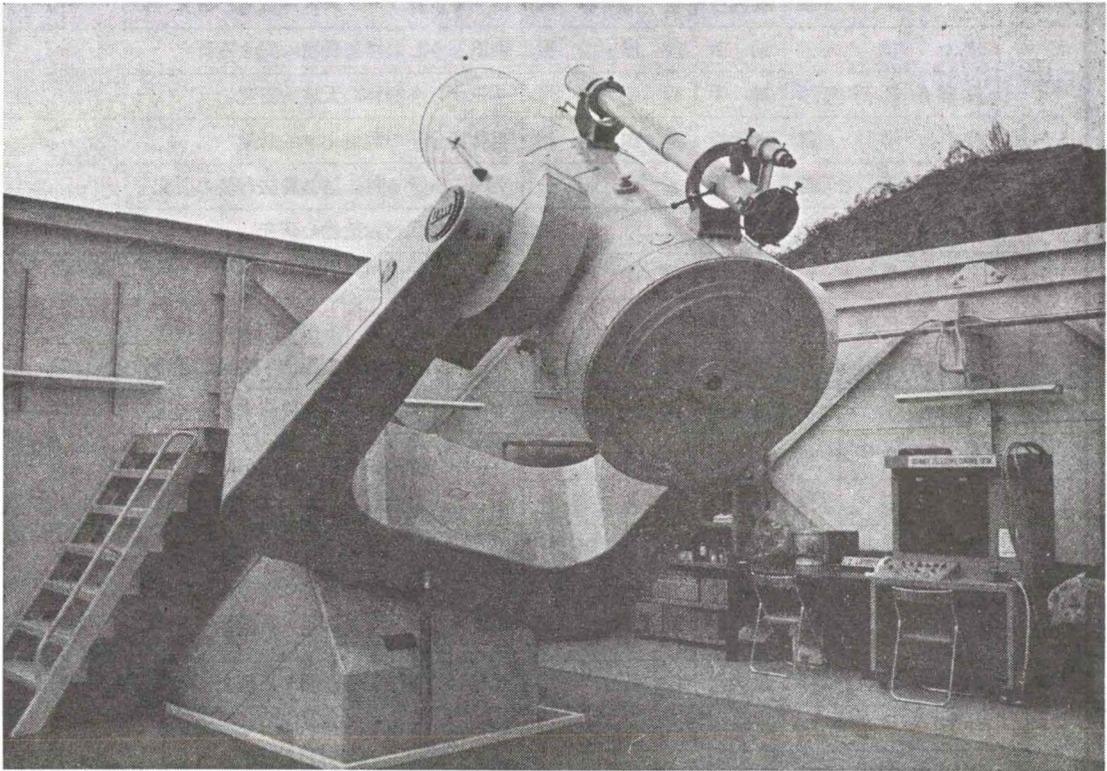


# 京大広報

No. 138

京都大学広報委員会



40/70/120 cm シュミット望遠鏡

(理学部宇宙物理学教室・大宇陀観測所に設置されたもので、  
F/3 視野7.1度の性能を有し、18.6等級までの星野を観測出来る)

## 目 次

昭和51年度の京都大学創立七十周年記念  
後援会助成金交付者について…………… 2

3月30日の揭示…………… 3

教育学部長、理学部長、工学部長、  
教養部長の交替…………… 3

大宇陀観測所の開設…………… 3

<随想>  
三つの京大  
名誉教授 吉川幸次郎…………… 4

<紹介>  
湯川記念館…………… 5

日誌・訃報…………… 6

## 〈大学の動き〉

### 昭和51年度の京都大学創立七十周年 記念後援会助成金交付者について

京都大学創立七十周年記念後援会助成金選考委

員会で決定した昭和51年度助成金交付者は、次のとおりである。

なお、この助成金についてのこれまでの経過は、京大広報 No.123 で報告されたとおりである。

## 1. 第1種（海外派遣研究員）

本学教官が、専攻する学問分野等について研究のため、海外に派遣される場合に助成金（往復航空賃および日当・宿泊料）を交付するものである。派遣期間は、1) 1か月 2) 約3か月 3) 約6か月である。

派遣期間	所属部局	職名	氏名	研究題目
6か月	文学部	助教授	服部春彦	18・9世紀フランス対外貿易の研究
〃	理学部	助手	前田靖男	細胞どうしの接着機構に関する研究
〃	数理解析研究所	助手	菅原邦雄	リーマン多様体の大域的研究
3か月	農学部	助教授	池田篤治	生体高分子の電気化学的研究
〃	教養部	教授	安藤昭一	英国における外国語教育法理論の研究
〃	人文科学研究所	教授	林巳奈夫	中国漢時代考古遺物の研究
1か月	文学部	教授	梶山雄一	チベット仏教資料調査及び第30回アジア・北アフリカ国際会議出席
〃	教育学部	教授	上田閑照	人間と自然、人間と文化・歴史・社会、人間と超越などの諸局面における根本問題の研究
〃	経済学部	助教授	山田浩之	ヨーロッパにおける都市・交通問題の研究
〃	医学部	助教授	山本尚三	プロスタグランジン合成酵素の研究
〃	薬学部	教授	井上博之	テルペノイド及びナフトキノ系諸物質の研究調査並びに第10回国際生化学会会議出席
〃	工学部	教授	野崎一	第3回小員環及び歪んだ多重結合の化学シンポジウム出席並びに有機反応化学の研究調査
〃	工学部	教授	小林昭一	第2回地盤力学数値解法国際会議出席及び岩盤力学に関する研究調査
〃	教養部	助教授	芦津丈夫	ゲートに関する研究
〃	結核胸部疾患研究所	助手	桂義元	細胞性免疫及び抗体産生に関する胸腺由来細胞の分化に関する研究
〃	木材研究所	助教授	佐藤惺	熱帯材の化学成分に関する研究
〃	食糧科学研究所	助教授	森友彦	第10回国際生化学会会議出席及び植物生化学に関する研究の現況調査
〃	体育指導センター	助教授	大山良徳	幼・青少年における身体の発育過程の国際比較と資料交換のため

## 2. 第2種（海外からの招へい学者）

海外から学者を本学に招へいし、講義・研究指導等を依頼して、その分野の研究の発展をはかるために助成金（往復航空賃、鉄道賃および滞在費）を交付するものである。招へい期間は、原則として2～3か月である。

受入部局	招へい学者名	国名・所属機関及び職名	研究題目
経済学部	Hans-Ulrich Wehler	ドイツ連邦共和国 ビーレフェルト大学教授	現代ドイツ及びアメリカ合衆国の社会史に関する比較的研究
理学部	Yuan Lang Chow	カナダ国 サイモンフレーザー大学 教授	オニウムラジカル化学、天然物、生理活性物質の有機化学
医学部	Axel Georgii	ドイツ連邦共和国 ハノーバー医科大学教授	悪性腫瘍とくに骨髄性白血病の治療の基礎に関する病理学的研究
化学研究所	Melvin S. Freedman	アメリカ合衆国 アルゴンヌ国立研究所主 任研究員	ベーター線分光学、重元素の核構造及び核遷移における原子効果

3. 第3種（海外派遣学術調査隊）

海外に滞在して調査研究を行なう本学の学術調査隊であって、原則として国費などの支給を受けるものを対象として助成金（所要経費の不足額の一部）を交付するものである。

代 表 者	調 査 者 名
工学部助教授 上 田 篤	南米都市における戸外空間調査
教養部助教授 米 山 俊 直	赤道アフリカ森林地域におけるエスノサイエンスと生態人類学の研究
霊長類研究所教授 川 村 俊 蔵	熱帯アジアにおけるヤセザル類の比較社会学的研究

3月30日の掲示

総長は最近の学内の事態にかんがみ、3月30日、次の掲示を出した。

（掲示第6号）

3月24日の卒業式において、壇上の総長を拘束しようとする約30名の学生集団によって混乱が生

じた。また最近、学内において一部集団による会議への乱入、教官・事務官に対する面会の強要や身体の拘束などの不当な事態が起っている。

このような行為は甚だ遺憾である。再びかかることのないよう、嚴重に警告する。

昭和52年3月30日

京都大学総長 岡 本 道 雄

<部局の動き>

教育学部長、理学部長、工学部長、  
教養部長の交替

4月1日、梅本堯夫教育学部長、溝畑 茂理学部長、桐楽良三工学部長、木下圭三教養部長の任期満了に伴い、その後任として次の各教授がそれぞれ任命された。

〔教育学部〕

蜂屋 慶教授（教育学科教育学講座担当）

任期は、昭和53年3月31日まで。

〔理学部〕

林 忠四郎教授（物理学科核エネルギー学講座担当）

任期は、昭和54年3月31日まで。

〔工学部〕

西原 宏教授（原子核工学科原子核機器学講座担当）

任期は、昭和54年3月31日まで。

〔教養部〕

作田啓一教授（社会学担当）

任期は、昭和53年3月31日まで。

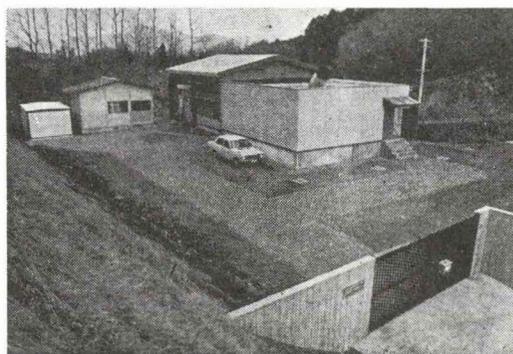
大宇陀観測所の開設

理学部宇宙物理学教室・大宇陀観測所の開所式が3月25日、溝畑理学部長、大宇陀町長はじめ学内外から約60名列席の下に現地で行なわれた。

同所に収められているシュミット望遠鏡は、文部省科学研究費交付金の補助を受けて製作し、昭和47年5月福知山市に設置され、昨年3月まで観測を続けてきたものである。しかし、市周辺の急速な開発その他諸々の事情により、他に移転せざるを得なくなり、一昨年6月頃から候補地の調査選定に着手し、予算・立地条件など厳しい制約の中で並々ならぬ困難があったが、町当局はじめ地元住民の絶大な好意と協力ならびに本学関係者の努

力により、漸く完成の運びとなった次第である。

この望遠鏡は40/70/120cmで、大きさの点からいえば中型ないし小型の部に属する。しかし、有効視野の広さ、カセグレン式との併用など、他

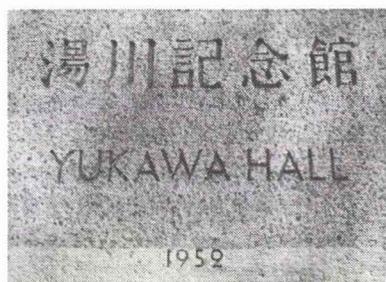




## &lt;紹介&gt;

## 湯川記念館

基礎物理学研究所（基礎研）の玄関には、「湯川記念館 YUKAWA HALL 1952」という文字が刻み込まれている。基礎研の建物が湯川記念館であり、訪れる外国人はユカワ・ホールと呼ぶ。



ところで建設以来四半世紀を経た現在、この湯川記念館が、かつては、京都大学に設置された一施設の名称であったことを知る人は少なくなってきた。そこで、湯川記念館が出来、それが基礎研に移って行った頃の事情を紹介しよう。

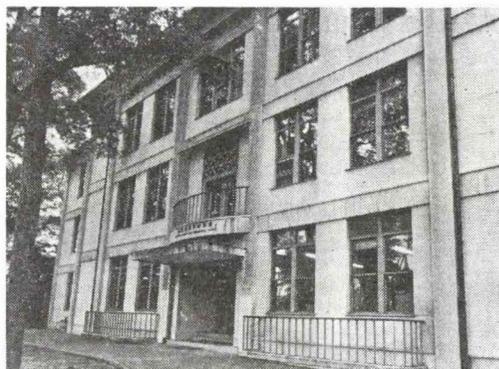
発端は、1949年（昭和24年）11月の湯川秀樹博士のノーベル賞受賞決定であった。鳥養利三郎総長（以下職名はすべて当時のもの）は、新聞社からの電話でこの知らせを聞き、すぐに記念事業のことを考えられ、翌日、理学部の荒勝文策教授を呼んで相談された。これとは独立に、その翌々日、京都大学清風荘で開かれた日本学術会議第四部会でも記念事業の提案があり、京都大学にも計画があると聞いて、茅誠司第四部長が、鳥養総長を訪ね、支持協力について話し合いが行なわれた。

これがきっかけとなって、翌1950年春には、湯川記念館建設の構想が生まれ、在米中の湯川教授の希望も入れて、具体案がまとまって行った。立案の中心は長谷川万吉 理学部長であり、設計は、森田慶一教授（工学部）が行なった。敷地については、理学部物理学教室北側の農学部の土地も候補にあがったが、結局、理学部植物学教室の協力で、理学部植物園の北西の一角の現在地が選ばれ、工事は1951年初めから翌年にかけて行なわれた。

これより先、1950年1月の日本学術会議総会では、「湯川博士のノーベル賞受賞記念事業について」決議を行ない、政府に実現への協力依頼を申

し入れていた。この年の夏には、小林稔教授（理学部）を通して、京都大学内での動きが、日本学術会議の原子核研究連絡委員会に伝えられ、運営方針について活発に意見が交換された。在米中の湯川教授からも、「理論物理学、特に素粒子論研究の全国的中心」にしたいという希望が寄せられた。これらの希望を実現していく途を見出すため、上記委員会の朝永振一郎委員長と小林稔教授は文部省との接触を続け、管理は京都大学が行ない、運営は全国の関係分野の研究者の意向をふまえて行なうという、大学附置共同利用研究所の構想が生まれてきた。朝永振一郎委員長、坂田昌一教授（名古屋大学理学部）、小林稔教授は、1951年秋に鳥養利三郎総長を訪ね、計画中の湯川記念館を全国的な研究機関として利用したいという研究者側の希望を申し入れ、総長の了承を得た。

このようにして、1952年7月21日の開館式を迎え、翌日から10日間の夏期セミナーに素粒子論の研究者が全国から約250名集るという形で共同利用が始められた。湯川記念館には、助手2名と事務官の定員が付き、助手は全国からの公募にもとづいて選考された。更に全国から研究生と研究指導者の招へいが行なわれ、共同研究が開始された。また、1946年湯川博士により創刊された月刊の学術誌 *Progress of Theoretical Physics* の編集・刊行もこの館内で行なわれることになり、今日国際的に高く評価されている雑誌に発展することに貢献した。



この「京都大学湯川記念館」は、1953年8月1日から運営の精神をそのまま継承し、基礎物理学研究所に発展したが、「湯川記念館」の名は今日でも親しみを込めて用いられている。

（基礎物理学研究所）

## 日誌

(1977年3月1日～3月31日)

- |         |   |     |   |
|---------|---|-----|---|
| 3月3日～5日 | 入学者選抜学力試験   | 19日 | フィリッピン国フィリッピン大学教授 Josefa M. Saniel 氏, 東南アジア研究センター訪問                           |
| 7日      | オーストラリア国教育省政策局長 Donard M. Morrison 氏来学  | 22日 | 評議会   |
| 8日      | ハンガリー国・国立カール・マルクス経済大学長 Berend Tibor Iván氏, 経済研究所を訪問                             | 〃   | 70周年記念事業による招へい学者ドイツ連邦共和国ビーレフェルト大学教授 Hans-Ulrich Wehler 氏, 経済学部を訪問 (4月2日まで)    |
| 9日      | マレーシア国 マラヤ 大学準教授 Stephen Hong-Chye Chee 氏, 東南アジア研究センターを訪問                       | 〃   | アメリカ合衆国カリフォルニア大学教授 Martin Trow 氏, 教育学部を訪問                                     |
| 14日     | 大学院審議会  | 〃   | インドネシア国科学院長 Bachtiar Rifai 氏 外4名, 医学部, 化学研究所, 東南アジア研究センター, ヘリオトロン核融合研究センターを訪問 |
| 14日～15日 | 原子エネルギー研究所学術講演会   | 23日 | スウェーデン国カロリンスカ大学教授 Börje Uvnäs 氏来学   |
| 15日     | 評議会   | 24日 | 卒業式   |
| 〃       | 放射線生物研究センターシンポジウム   | 25日 | 附属図書館商議会  |
| 16日     | 安全委員会   | 26日 | 創立70周年記念後援会助成金選考委員会   |
| 〃       | 70周年記念事業による招へい学者アメリカ合衆国アルゴンヌ国立研究所主任研究員 Melvin S. Freedman 氏, 化学研究所を訪問 (4月30日まで) | 28日 | 廃棄物処理等専門委員会   |
| 17日     | 附属図書館講演会  | 29日 | 評議会   |
| 18日     | 医療技術短期大学部専攻科修了式   | 〃   | 保健衛生委員会   |
| 〃       | 原子炉実験所学術講演会   | 30日 | スウェーデン国大使 Bengt Odevall 氏, 農学部附属演習林を訪問  |

## 訃報

- |      |                   |     |                  |
|------|-------------------|-----|------------------|
| 3月7日 | 医学部附属病院 神崎サカエ技官逝去 | 23日 | 食糧科学研究所 秦 忠夫教授逝去 |
|------|-------------------|-----|------------------|